

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百八十二回 表権七先生のこと その一

南出喜久治（令和7年7月15日記す）

私は、弁護士である表権七先生の法律事務所で高卒後に事務員として司法試験に合格する直前まで務めてゐた。

父と同郷の石川県出身の内務省官僚（防疫担当）から高文に合格して検事となつたが、敗戦後、昭和天皇とマッカーサーとの写真が新聞に掲載されたことに憤慨して直ぐに検事を退職し弁護士になつた人である。そして、政治をこころざし、弁護士をしながら自民党の京都府議会議員（中京区）を長く勤めたが、表先生が次期衆議院議員候補になる約束をした同郷の小川半次が裏切つて約束を反故にしたことには憤慨して府議も退職して政治活動からは身を引いて、その後は弁護士として活動してきた。

私は、高校卒業後に家業を継ぎながら民社党入党して、京都府連（四条新町）に出入りしたことから、京都一区の永末栄一代議士や西尾末広、西村栄一（西村真悟の実父）、春日一幸の歴代委委員長との会遇の機会が増へ、中でも枚方の岡澤完治代議士（西村真悟の義父）と非常に親しくなつて、いろんなことを学んだ。

19歳で中京区支部の書記長となつて、261青年隊（京都一区の民社党青年隊）の事務局長を務めた。

昭和42年の総選挙では、民社党の永末は、76票差で5位（定員5名）カツカツで当選した。このとき、社会党の右派と左派とが6位、7位で共倒れし、昭和44年暮れの選挙では社会党候補が一本化して左派の坪野米男が立候補してきたので、誰が考へても永末が落選すると思はれてゐたときの選挙直前から私の党活動が始まった。

未成年は党活動はできても選挙活動はできない。そのために、年齢も生まれた干支も誤魔化して、警察の職務質問を受けることに備へたが、職務質問される機会はなく嘘をつかずには済んだ。

昭和44年の暮れに衆議院が解散したのに、永末は京都に直ぐに戻つてこなかつた。それは、当時、田中角栄から多額の選挙資金を貰ふ交渉をして獲得してきたらしい。その内から300万円の資金を私が預かつて10名ほどの青年隊を率いて京都市内での選挙活動を受け持つた。

田中は、京都での容共の社会党勢力を低下させるために永末を応援したのである。いやなことを知つたものの、反共の目的のための共同戦線であるとして自分を言ひ聞かせて飲み込んだ。そして、徹底した活動を展開し、その結果、永末を2位で当選させ、坪野は落選した。

のことから全国的に社会党の長期低落傾向が始まった。そして、その後、いくつかの選挙を経験し、市長選挙の最中に、父から電話があり、司法試験第一次試験に合格した通知が来たと連絡があつた。当然に合格すると思つてゐたので大きな感動はなかつたが、父としては、政治運動ばかりしてゐる息子がこれから受験勉強をして大人しくなることを期待したのか、そのことを表先生と相談したらしい。勉強の方法を教へてもらふとして表先生の事務所に行かせるので、息子を説得してもらつて表先生のところで雇つてやつてほしいとの頼んだらしい。

さうとも知らない私は、自民党の元府議の弁護士のところに行けば、政治論争になるだけだと思ったが、親の指示には逆らへず訪問することにした。

案の定、自民党と民社党の論争になつた。そして、話が終りかけたときに、表先生から、ではいつから事務所に来るのか、と言はれて驚いた。そして、父親と就職の話ができるといふことを説明された。

家業の仕事も父親と時間制で分担しており、夕方からの裏方の仕事と、風呂掃除などは私が全部することになつてゐたので、時間を限れば務められないわけではないが、政治活動に支障がでるのは困るので、この就職話は厳しい問題だつた。

しかし、父親が表先生と約束までしたのであれば、これを断ると父親に恥をかかせることになる。父親も今の状態であれば昼と夜を分けて私の分担できるので、父親もそのつもりだつたのであらうと思った。そして、いろいろと会話をしながら考へたあげく、帰つてから父親と改めて相談しますとした上で、朝から午後 5 時までなら務められると思つたので、それであれば務めさせていただきますと返事した。

ただし、選挙のときは時間を割いてくださいと言つたら、承諾してもらつた。

いつから来るかと聞かれたので、明日から行きますと答へた。

昭和 46 年 1 月 31 日のことであつた。